

「ねんごろ」の意味と語源

★要点：「ねんごろ」は本来「心がこもっている」状態を指す言葉であり、その意味は、決して「男女の情愛」に限定されるものではない。

● 「ねんごろ」の意味

★概略：「ねんごろ」とは、心がこもっているさま。親身なさま。親しいさま。親密になること。男女が深い仲になること（＝ねんごろになる）。男色関係をもつこと。

ねんごろ【懇ろ】

《「ねもころ」の音変化で生まれた語である。詳しくは後述》

ねんごろ・なり【懇なり】

古語では**形容動詞ナリ**活用 → 活用（なら／なり・に／なり／なる／なれ／なれ）

①手厚い。親切だ。丁寧だ。入念だ。心がこもっている。親身だ。

「ねんごろにとむらう」「ねんごろなもてなし」

「朝（あした）には夕（ゆふべ）あらんことを思ひて、重ねてねんごろに修（しゆ）せんことを期（ご）す」（出典徒然草・九二）【訳：朝には夜があることを思って、もう一度入念に身につけることの心積もりをする。】

②（仲が）親密だ。懇意だ。むつまじい。親しい。

「一な間柄」

「思ひわびて、ねんごろに相語らひける友だちのもとに」（出典伊勢物語・一六）【訳：思い悩んで、親しく交際していた友人のもとに。】

③一途（いちず）だ。本気だ。まともだ。正直だ。

「世俗の虚言（そらごと）を、ねんごろに信じたるものをこがましく」（出典徒然草・七三）【訳：世間のうそを、正直に信じているのもばかげていて。】

【名詞】

① 親密になること。

「お前（まへ）は貧乏神と懇ろしてござるかして」（浮世草子・江島其磧「傾城禁短気」1711年）

② 男女が情を通じること。ひそかに肉体関係を持つこと。

「今までしたる懇ろの空しくなる事をあたらものと思ひ」（仮名草子「難波物語」）

「此のお夏は手代と懇ろして」（浄瑠璃・近松半二「新版歌祭文」1780年）

③ 男色関係を持つこと。

「我若年の時衆道の懇ろせし人住家もとめてありしを」（浮世草子・井原西鶴「好色一代男」1682年）

「主の子を懇ろして」（浮世草子・井原西鶴「男色大鑑」1687年）

【慣用表現】

●懇ろになる = 親しい仲になる。特に、男女が情を通じる間柄になる。

●ねんごろあい【懇ろ合ひ】 = 親しい間柄であること。また、男女が情を交わした仲で

あること。

「小かんがいとしがる人と言うて互ひの懇ろ合い」(浄瑠璃・氷の朔日・上)

●ねんごろぶん【懇ろ分】= 親しい間柄の人。特に男色の関係を結んでいる人。
「役者仲間に懇ろ分を求めて」(浮世草子・男色大鑑・七)

●ねんごろ-が・る【懇ろがる】

[動詞・ラ行・四段活用] 親しいようすをする。

「試み事にねむごろがらむ人のねぎごとに」(源氏物語・常夏)

●ねんごろ-き・る【懇ろ切る】

[動詞・ラ行・四段活用] 縁を切る。男女の関係を断つ。

「畢竟おのれは傾城なれば飽いた時は懇ろ切る」(浄瑠璃・用明天皇職人鑑)

(参考：<http://jiten.eu/article/58270>)

<http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/170943/m0u/>

<http://kobun.weblib.jp/content/%E3%81%AD%E3%82%93%E3%81%94%E3%82%8D%E3%81%AA%E3%82%8A>)

● 「ねんごろ」の語源・由来

ねんごろは、上代には「ねもころ」と言ったが、この「ねもころ」が変化して「ねむころ」となり、更に「ねんごろ」へと変化した。「ねもころ」の語構成は、

- ①「ね(根)」+「もころ(如)」か、
- ②「ね(根)」+「も(助詞)」+「ころ(凝)」

だと考えられている。①も②もともに「根の如く密に絡み合う」といった意味になるが、①は「根のごとく」、②は「密集して絡み合う」様子に重きがおかれた表現である。上述したような「ねんごろ」のさまざまな意味から推測すれば、②の「根も凝」に由来すると考えるのが妥当であろう。さらにまた、「ころ(凝)」は「心」の語源と考えられているという事情も勘案すれば、「ねんごろ」の語源は「根も凝」であると考えてよさそうだ。

「ねんごろ」は「心をこめて思うさま」を意味する言葉であったが、そこから転じて「親しいさま」も表すようになり、「親密になること」や、さらに「男女が深い仲になること」も意味するようになった。

(参考：<http://gogen-allguide.com/ne/nengoro.html>)